

## 【特別講演 要旨】

ホイットスラーと世紀末文学の詩学

ワイルド、ペイター、シモンズ

武庫川女子大学 教授 玉井 暲

イギリス世紀末文学の詩学の本質とはいったい何であろうか。この問題を考えるに当たっては、世紀末の文学者たちが行なった「美術批評」(Art-Criticism)の存在を抜きにしては十分な解明は得られないであろう。世紀末の文学者は、文学の根本問題を考えるのに、絵画とのアナロジーにおいて考察を展開し、文学の理想のかたちを模索していったのではあるまいか。

いま、James Abbott McNeill Whistler を取りあげ、彼の画家としての芸術の実践者というよりも、むしろ芸術の批評家として発表した絵画論に注目し、その理論が同時代の世紀末文学者たちの提起する文学理論といかに関わっているのか、検証してみたい。

具体的には、ホイットスラーが「午後十時の講演」(1885)等のエッセイにおいて展開した「逸話性から解放された自立的色彩空間として絵画」という発想が、ワイルドの「芸術家としての批評家」(1891)および「蝶のボズエル」(1887)等のホイットスラー論、ペイターの「ジョルジョーネ派論」(1877)、アーサー・シモンズの『文学における象徴主義運動』(1899)および、「ホイットスラー論」(1903、1905)等で窺える文学論といかに関わっているかを検証することになろう。